詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

再診のハンカチ固く握り締む
宮崎市　境　雅子

△評▽医師の前で診断を聞く時、手のひらまで汗がにじむ。緊張感と不安が伝わってくる。結果はどうだったのだろう。

少年もうつむき帰る極暑かな
河内長野市　滝尻　芳博

△評▽暑さのせいか、試合に負けたか、普段は元気な少年の姿に読み手の心もうちひしがれる。

電線のカラス口開く暑さかな
豊田市　松本　、文

歳時記を開いたままに大昼寝
倉敷市　行本　章允

噴水も風によろけてしまふ午後
川口市　高橋さだ子

ようこそと駅の風鈴鳴りにけり
岩　手　佐々木松男

幻の一句となりぬ昼寝覚
奈良市　上田　秋霜

妻のさす日傘に入りて歩を緩め
平塚市　正好　浩

夏帽を数へて点呼吟行会
横浜市　相沢恵美子

摩天楼を跨ぎて虹の立上る
羽生市　岡村　実

井上　康明　選

葬列に空より落つる蟬の声
相模原市　はやし　央

△評▽野辺送りの葬列を思い浮かべた。「空より落つる」とは、死者を悼み、参列者を慰めるようにセミが鳴きしきることではと思う。

炎昼や足元に影うずくまる
延岡市　河野　正

△評▽真上から、日差しが照りつける。その激しさに、影は動くことができないのだろう。

出発の空砲一つソーダ水
出雲市　石原　清司

縦置きのレンタサイクル夏の雲
京都市　根来美知代

歩くことも仕事の一つ盛夏かな
平塚市　日下　光代

谷川の水激しをり地蔵盆
富士市　後藤　秋邑

襟足を剃って仕上げの天瓜粉
横浜市　斎藤　山葉

芭蕉恋ふ遊行柳の下に立ち
伊賀市　福沢　義男

長命の母のソプラノ朴の花
松山市　板倉　裕子

人生を楽しむ句作ほととぎす
唐津市　梶山　守

片山由美子　選

梅雨晴やもう一度拭く窓ガラス
和歌山市　曽根　澄子

△評▽久々に晴れた一日、家のあちこちの掃除に精を出す。窓ガラスを徹底的に磨きあげることで気分も晴ればれしたことだろう。

木立より不意にしづかに揚羽蝶
西宮市　平田　あい

△評▽夏のチョウはアゲハチョウなど大型のものが多い。「不意にしづかに」が、その動きを活写。

蟬しぐれ奥の院まで五百段
奈良市　上田　秋霜

日曜の昼はひとりの冷さうめん
鹿児島市　平川　玲子

アロハ着て子にほめられてゐたりけり
越谷市　新井高四郎

隠岐行きのフェリーの汽笛青岬
米子市　岩水　節子

灯を廻し舳先を廻す祭船
弥富市　富田　範保

ふるさとの槇の生け垣片かげり
館山市　岡崎　建一

少年の眼鏡なじみて夏の果
東京　渡邊　顯

夏夕べベンチに帽子忘れられ
橿原市　信賀　美保

小川　軽舟　選

昼顔や老人ホーム音もなき
青梅市　持田砂地女

△評▽食事やレクリエーションの合間の静まりかえった時間。ヒルガオの花の明るさ、寂しさが空白感を際立たせる。

語らへば星座傾くキャンプの夜
仙台市　引地　恵一

△評▽満天の星の下でのキャンプ。語らう時間の経過を「星座傾く」で表したのが巧みだ。

なみなみと土用蜆の父の椀
いわき市　織内あさ陽

風鈴の余韻短し肘枕
越谷市　塚田　順次

昼寝から覚めてのつぺらぼうの顔
飯塚市　白木　小鳩

炎昼や再放送の西部劇
東久留米市　矢作　輝

太陽へ水鉄砲の試し撃ち
広島市　村越　縁

白南風やサーカス団に象と虎
出雲市　石原　清司

帰り道クチナシの香を楽しみに
茅ケ崎市　戸川　香織

彼岸花スーパーカブの法師過ぐ
逗子市　宇野　明信

調べの鼓動

俳句の根源　星野高士

今でこそ俳句の大会は全国にたくさんあり、欠かせないのはそこに発表、表彰される募集句である。私もいくつかの選考委員をしているが、その中でも面白いのはアプリ「俳句てふてふ」の「全国景勝地俳句コンテスト」である。

大会のほとんどは自由題とか季題が出されたり、最近では言葉などが出る題詠だが、同コンテストは「山岳」「渓谷」「河川」「湖沼」「温泉」といった類いのものなのである。元は1930（昭和5）年に高浜虚子が大阪毎日新聞・東京日日新聞（いずれも毎日新聞の前身）と始めた「日本新名勝俳句」で、選者は虚子一人。今はホトトギス主宰の稲畑廣太郎氏と私。そして最近は山田佳乃さんと和田華凜さんが加わっている。

虚子は帝国風景院賞（金賞）に次のような句を選んだ。

・谺して山ほととぎすほしいまま
杉田久女

・啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々
水原秋桜子

・滝の上に水現れて落ちにけり
後藤夜半

・下り鮎一聯過ぎぬ耐かげ
川端茅舎

当時は名も無い俳人たちだったと思えるが、この名勝俳句募集によって今でも語り継がれていることがよく分かる。

何と言ってもすごいのが、応募句数が10万句を超えていたということだ。俳句は自由に作れるが、目的意識を持って作るということは集中力を高める一つの要素になっていることが欠かせない文芸なのである。（ほしの・たかし＝俳人）